

「ノダ」文の意味再考—参照点構造の観点から—

こう てん

高 甜（東京外国語大学大学院生）

1. はじめに

「ノダ」文は、「A ノハ B ノダ」という主題-解説型の形をした説明の構造の一種で、その中心的な意味機能は、ある事柄の「背後の事情説明」を表すという解釈（山口 1975、田野村 1990 など）が広く受け入れられている(1) (2)。主題は「A ノハ」に当たる部分で、「ノダ」文の内容に意味的に関連づけられる部分（先行主題）を指す。解説は「B ノダ」に当たる部分で、主題「A」が一体どういうことなのかという事情説明を与えている。

(1) 「外で音がするのは雨が降っているのだ」 （山口 1975 : 16）

(2) 「（地面が濡れているのを見て）雨が降ったのだ」 （田野村 1990:1, 一部改変¹）

(2)' 「地面が濡れているノハ雨が降ったノダ」

いずれも「A ノハ B ノダ」という形に還元できる。「ノダ」が解説を担う役割として構文的にも意味的にも必要とされている。しかし、次のように先行主題ではなく、文法上の主題（文内主題²）を持ち、背後の事情説明を表すとは言いにくい例も度々観察される。

(3) 「美しいものは美しいのだ」 OB3X_00034³

(4) 「秀吉は利休が必ず助命を嘆願してくるものと見込んでいたのである」 PB12_00086

構文上では先行文や発話状況と協同して「A ノハ B ノダ」という形に還元する余地がなく、意味上では先行文や発話状況に対して背後の事情説明を与えるという「ノダ」の役割も失っていると言えるのであろう。そして「ノダ」がなくても文の認容度が変わらない。このように構文的に主題-解説の構造を持ち、意味的に背後の事情説明を表すという従来の観点は、文内主題を持つ「ノダ」文の意味をカバーできない所が見えてくる。

これまででは、「ノダ」文は先行主題を文構造の一部として考慮に入れているとは言え、主に解説を担う役割としての意味が注目されてきた。「ノダ」文における主題そのものの検討や、「ノダ」文における主題の現れ方を考慮した上での意味分析については、なお検討の余地がある。本発表の目的は「ノダ」文における主題の現れ方を把握した上で、「ノダ」文の意味構造を明らかにすることにある。

2. 先行研究

2.1. 「ノダ」文に関する記述

既成命題に「ノダ」を添えることによって文を名詞文の結びに変えると見ている三上（1953）から、「～のは～のだ」という形を「ノダ」文の基本形とする山口（1975）までの考察によって、構文論的基礎がほぼ固まっている。また「ノダ」文は典型的な題述文「X は Y だ」とであると指摘した寺村（1984）は、名詞文と認める点ではこれまでの名詞文説と一貫していたように見える。この名詞文とする見方は、益岡（2007）で提案された「名詞

¹ 元の例は「雨が降ったのだ」であるが、田野村（1990:1）では「（地面が濡れているのは）」ということばで表現されていない主題が常に潜んでいる」という解釈がなされたので、本発表は潜在部分「地面が濡れているのを見て」を加えた。

² 以降文法上の主題を「文内主題」と呼び、「ノダ」文の内容に意味的に関連づけられる部分を「先行主題」と呼ぶ。

³ BCCWJ で検索した用例のサンプル ID である（最終閲覧日：2021 年 8 月 15 日）。

文のコト拡張」説によってさらに受け継がれてきた。

意味機能を中心に考察したものとしては、久野（1973）の「説明」説⁴がより早い段階で打ち出された。後に「ノダ」文の多様な表現効果を分類している吉田（1988）もあれば、その多義性を「背後の事情」や「実情」を表すという基本的意味機能で統一的に整理した田野村（1990）もある。野田（1997）は構文上必要とされるスコープの「ノダ」とそうでないムードの「ノダ」に分けて、さらに後者に対して対人的・対事的また関係付・非関係付という二つの軸を基に四類に分類し、モダリティの枠組みの中に位置付けている。

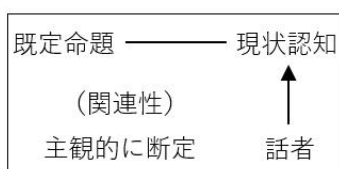


図1 「ノダ」の意義素

国広（1992）は「ノダ」の意義素について、「現状を出発点としてそれと何らかの関係のある命題を既定のものとして提示する。既定とは過去の事実とは限らず、未来についての計画でもある」と定義し、それを図1（国広1992:19）のように示した。つまりある現状を認知するという主体的行動を行い、それと何らかの関連があると主観的に判定される既定命題を「ノダ」の前に提示するということである。

2.2. 先行研究の問題点と示唆

先行研究の問題点を2点述べる。(1) 構文論的に位置付ける説明は限界がある。山口(1975:16)自身が指摘したように「外で音がする。(やっぱり)雨は降っているのだ」のような文は、既に主題「雨」を具えているため構文論的基礎を失っているという。(2) 背後の事情説明という意味解釈の面において説明の対象がはっきりされていない。従来「ノダ」文による解説や説明の機能に注目する研究がほとんどで、何についての説明かを示さないままその説明の対象となるものは、常に「主題」という元来難しい術語で済ませていては逆に混乱を生じさせかねない。一方、国広（1992）による「主体的行動」「主観的に判定」という指摘は、人間の主体的側面を重視する点として認知言語学的視点から示唆的である。

3. 主題の認知言語学的解釈

3.1. 参照点構造と主題

まず、参照点構造の基盤となる参照点能力（Langacker 1993）を確認する。

(5) The ability to invoke the conception of one entity for purposes of establishing mental contact with another, i.e., to single it out for individual conscious awareness.

(Langacker1993:5、下線は筆者より)

図2（Langacker 1993:6）に参照点構造を示す。認知主体（C）は、ある認知的際立ちが強い存在（entity）に参照点（R）として注意を向け、その参照点によって喚起される潜在的なターゲット（T）の集合である支配域（D）の中からTを選んで、それに焦点を移行している構造である。アクセスする心的経路が点線の矢印で示される。太い線の円は、内在的或いは文脈的に由来するある種の認知的重要性（cognitive salience）を持っている、即ちプロファイルされていることを示す。つまり、人間が常に際立っている存在（R）に目を向けているが、ある存在（T）に直接にアクセスすることが難しい場合に、Rを経由して間接的にアクセスすることになるという認知構造である。

⁴ 久野暉（1973:149）で、「ノデス」は話し手が先に言ったこと、したこと或いは話し手の状態に対する話し手の説明を与える。話し手がこれから述べようとするに対する説明を与えるという用法はないと述べている。

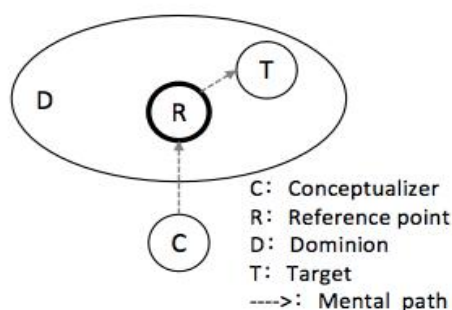


図 2 参照点構造

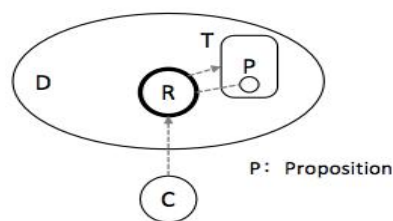


図 3 主題「ハ」の意味構造

Langacker(2008:512-517)は「主題 (topic) を参照点構造を反映するものである」と分析する。図 3 (Langacker2008:513) で示すように、主題は R で、それと関連する知識が D として喚起され、それと照らして命題 (P) が説明される⁵。主題としての参照点アクセスしようとする T は命題 (P) である。

そして、存在 (entity) としての参照点やターゲットは、物事 (thing)、関係 (relationship)、プロセス (process) の全てが含まれていると、Langacker (2008:98,99) で述べている。従って、R も T もこれらの全てを包括することになり、存在 (entity) のあり方として、モノだけではなく、コトの R も理論上あり得るのである。これは「ノダ」文の主題の現れ方に大きく関係していると考えられる。

3.2. 「ノダ」文における主題

(6) 「この時のポイントは、『筆箱の鉛筆』と『連絡帳』である。『筆箱の鉛筆』は削らせ、『連絡帳』は元に戻るのだ」 PB43_00774

(7) 「重いよ。ブロンズで作っているのだ」 PM11_00002

これらは普通に使われている「ノダ」文であるが、よく考えると主題の現れ方が大きく違う。(6)は「連絡帳」という主題と「元に戻る」という命題が「は」で結ばれ、堀川 (2012) でいう「処置課題-処置内容」という意味関係が成り立つ。これは、図 3 のような主題構造が適用でき、つまり文内主題は R で後続する命題 (P) は T で、「ノダ」は T のマーカーとなると解釈できるのである。一方、(7)は先行文の「重いよ」という事態全体が R として際立たせ、それについて原因の説明の集合 D から「ブロンズで作っている」という T が選択され、図 3 ではなく、図 2 の参照点構造が適用できる。前者は主題のマーカーである「ハ」によって、モノ的な存在を主題として際立たせるのに対して、後者は先行主題、即ち意味的に関連づけられているコト的な存在を主題として際立たせている。いずれも事態認識レベルではプロファイルされた R が存在する点で共通している。本発表は、事態認識レベルにおける R の性質に応じて、前者を A タイプ「モノ参照点」と、後者を B タイプ「コト参照点」の二種に分けて進める。

ただし、文法上の主題「ハ」があるから必ずしも「モノ参照点」であるとは限らないことに注意してほしい。特に指示詞が主題に立たされた場合に「コト参照点」となる可能性が大きい。(8)の「あれ」が指示するのはある特定のモノではなく、先行文の「外で音がする」が表す事態全体、即ち「コト参照点」と見るべきであろう。

(8) 「外で音がする。あれは雨が降っているのだ」 (山口 1975:16)

⁵ Langacker(2008:513)によれば、小さい円は P における R と関係している軸項 (pivot) であるという。

4. 参照点構造に基づく「ノダ」文の意味

4.1. 「モノ参照点」の「ノダ」文

「ノダ」文の意味は、上記のような主題の現れ方（モノ参照点かコト参照点か）が大きく影響していると考えられる。

(9) 「この時のポイントは、『筆箱の鉛筆』と『連絡帳』である。『筆箱の鉛筆』は削らせ、『連絡帳』は元に戻すのだ」 (6)

(10) 「その先輩は、一緒に酒を飲むたびに自分を責め続けたのだ」 PB1n_00024

(11) 「喜代は只三郎といるときが一番幸せなのだ」 PB19_00545

(12) 「喧嘩っていうのはさ、止めるのが難しいんだよ」 PM11_00002

波線部は「モノ参照点」Rで、ノダで括る命題はTである。例えば(9)では「連絡帳」がR

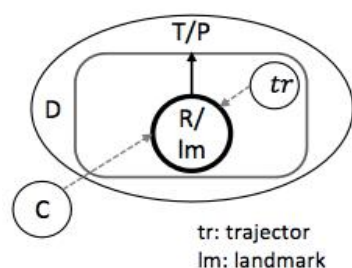


図 4 モノ参照点の「ノダ」文

で「元に戻す」がTに当たる（図4⁶を参照）。「ハ」が結びつく名詞句が参照点(R)で、そのRがアクセスするターゲット(T)は後続部分で述べられる命題(P)である。Rはプロファイルを受ける要素なので、太い線で描かれている。ここでRとTがお互いに独立した存在ではなく、RがTに内在することがポイントである。RからTへの矢印が実線で示しているのはこの内在的、客観的關係を意味している。例えば、「連絡帳」は文レベルにおいてはRであり、後続するP節においては「連絡帳を元に戻す」

のように目的語であるランドマーク(lm)の役割を果たしている。他の例の主題も文レベルではRとし際立たせていて、後続する命題の中で(12)はlm、(10)(11)は主語であるトラジェクター(tr)の役割をしている。つまり、主題はRであると同時に後続するP節の内部要素でもあり、RとT/Pが内在的客観的な関係にあるということになる。このように、「モノ参照点」の「ノダ」文は、文構造では主題と命題の間に「ハ」が介在して前後に断裂があるにも関わらず、事態認知レベルではやはり一つのまとまった事態として考えるべきである。ここでの客観的關係とは、ある対象が認識主体と切り離れて存在すると見なされるような関係である。認知主体の見方と関わりなく、誰がどう見ても「その対象がそのように存在している」という唯一の解釈しか与えられない関係である。一方、主観的關係とは、ある対象の存在が常に認知主体の見方を前提としていて、認知主体が個人的に「その対象がそのように存在している」という解釈を与えているような関係である。

(12)を例として、主題の「喧嘩」と命題の「止めるのが難しい」との間の関係は明確に述べていないので、「喧嘩を止めるのが難しい」や「喧嘩に止めるのが難しい」や「止めるのが難しい喧嘩だ」といったように、聞き手が可能性としていくつかの理解ができるはずである。しかし、通常話し手と聞き手の間に特に誤解なくスムーズにコミュニケーションができる。それは何故かという、わざわざ言明しなくても文脈や背景知識に照らすことによって話者の意図する意味を聞き手も正しく理解できるという客観的關係が存在するからである。従って、この客観的關係の外側に「ノダ」があってもなくても、文の意味内容としては当然変わらない。この意味で、「ノダ」を一つのまとまった「準詞」（三上1953）、ムードの助動詞（寺村1984）として扱う先行研究も一理あるように認めざるを得ない。

⁶Langacker (2008:517) によれば、文や句の中で最も際立ちの高い要素を「第一の焦点」(primary focal participant within the profiled relationship)として trajectory (tr) と呼び、次に際立つ要素を「第二の焦点」(secondary focal)として landmark (lm) と呼び、文レベルでそれぞれ主語、目的語に相当するという。

4.2. 「コト参照点」の「ノダ」文

このタイプは、通常「ハ」という主題が言語レベルでは明示化されていないが、事態認識レベルではプロファイルされた「コト参照点」Rが存在する。また、表現上の違いに応じて、タイプBを、B1「先行文としてのコト参照点」、B2「発話状況としてのコト参照点」、B3「いきなりノダ文」と三つの下位分類に分けた。

4.2.1. B1「先行文としてのコト参照点」

(13) 「重いよ。ブロンズで作っているのだ」 (7)

(14) 「もう中絶などできない。出産予定日は目前なのだ」 PB43_00044

(15) 「市太郎の左手でも関の声が上がった。織田勢が守っていた馬防柵の全体から飛び出したのだ」 PM31_00326

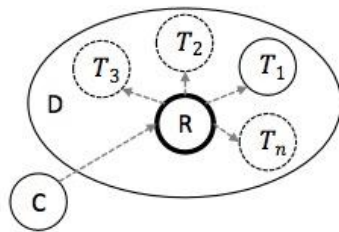


図 5 コト参照点の「ノダ」文

C: 認知主体

R: 「重いよ」

T_1 : 「ブロンズで作っている」

$T_2 \sim T_n$: 他の可能性

$D: T_1 + T_2 + \dots + T_n = \sum_{i=1}^n T_i$

いずれも先行文で表す内容が「コト参照点」Rで、ノダ文はTである。図5で示すように、例えば、(13)は「重いよ」という文が表す内容がRとして最初に聞き手の注意を引いた。それによって喚起される潜在的なTの集合である支配域D、例えば「金で作っている」「中に水がいっぱい入っている」などのことが聞き手が可能性として考えられる。そして話し手が最終的に「ブロンズで作っている」という T_1 を説明の内容として選んだ途端に、聞き手が話し手の意図通りに T_1 に焦点を移行し、伝達に成功したわけである。

ポイントは、RとTが外在的、主観的關係にあることと、Tが間接的に把握されることの2点である。一点目の主観的關係は話し手と聞き手の間に認識のギャップが生じる背景となり、聞き手に対する説明の必要性を促し、二点目の間接性は背後の事情の存在を語り、いわゆる背後の事情説明(田野村 1990)の意味はこれらと関わっているのではないと思われる。この場合、「ノダ」は本来的に聞き手にとって把握しにくい存在をTとして説明

するために用いられ、それがなくては文の認容度が落ちる。

4.2.2. B2「発話状況としてのコト参照点」

(16) a. (泣いている女の子を見て) 「彼女は悲しいのだ」 (作例)

b. (泣いている女の子を見て) 「*彼女は悲しい」

(17) a.(地面が濡れているのを見て) 「雨が降ったんだ」 (2)

b. (地面が濡れているのを見て) 「*雨が降った」

ことばで明示されているのではなく、知覚している状況が認知的に際立っている「コト参照点」Rとして見られる。(16)は「泣いている」という目の前の状況をRとして、直接に知ることが難しい他者の心理状態を把握しようとする際に、「彼女は嬉しすぎる」「彼女は感動した」といったことが考えられるDの中で、場面や自分の背景知識と照らして推論しながら「彼女は悲しい」というTを選んだ。この場合もRとTが主観的關係にあり、「ノダ」が推論の結果即ちTを提示するマーカーとなる。図5のような参照点構造が示すプロセスが話し手の中で行われていると考えられる。bが非文となる理由は、直接的に判断できない場合にも関わらず、推論なしで直接的な表現を取るのではないと思われる。

4.2.3. B3「いきなりノダ文」

- (18) 「やばい、先生が来たんだ」 (金水 2021:例 24)
(19) 「あ、財布がないんだ」 (同上)
(20) 「昔、本土の方から来た嫌な役人がいたんだ」 PM12_00014
(21) -吉祥寺のハルコが秋に退職するんだ。

-結婚するの。

PB53_00055

先行文や発話状況なしでいきなり「ノダ」文が出てきた文であるから「いきなりノダ文」と名前を付けたわけである。表現上から見ればそのように思われるかもしれないが、実は B1 と B2 と同じように事態認識レベルではプロファイルされた「コト参照点」R が存在する。

(18) (19) は金水 (2021) では非文として扱われているが、ある想定がなされた上でその想定とズレる出来事 (「先生が来た」「財布がない」こと) を発見した時の発話として可能である。(20) (21) は、これから話す内容について聞き手が知らないと話し手が想定した上で新情報の告知として「ノダ」文が使われる。つまり前もっての想定は R に相当し、「ノダ」文は T に当たる。ここで R と T との間の不一致がポイントとなっている。

不一致がない場合と比べて考えてみよう。(20) (21) に確認の「ね」を加えて「?吉祥寺のハルコが秋に退職するんだね」となると、談話的に文の認容度が落ちるし、(19) は「財布がないということを予め知っていた」上での発言とは考えられない。つまり、ある想定を前提とした上でそれと不一致の出来事或いは情報があるという条件が暗黙のうちに要求されているのである。その想定は発話時の前に既に認識主体の中に存在するという時間的にも認識的にも先行している点から、R とみなす資格を持つのである。このような R は、何らかの形で表現されなくても聞き手 (独り言の場合は話し手自身) の理解に支障がない内容なので、無標の形として認識主体の中にあるとってよい。いきなり「ノダ」文の形として現れる所以だろう。

5. まとめ

本発表の主張を次の 3 点にまとめる。(1)「ノダ」文は参照点構造で捉え直すことができ、「ノダ」文における主題が参照点、「ノダ」文がターゲットとしての役割を果たす。(2)「ノダ」文の主題は参照点の性質から A「モノ参照点」と B「コト参照点」に大別でき、また表現上の違いに応じて B を更に B1「先行文としてのコト参照点」、B2「発話状況としてのコト参照点」、B3「いきなりノダ文」に分類できる。(3)「ノダ」文の多義性 (説明、推論、発見や新情報の告知) の背景には以上のような主題の現れ方による影響があると考えられる。

【参考文献】

長谷部陽一郎 (2001) 「参照点構造における主観的關係と客観的關係」言語科学論集 7:91-102. /堀川智也 (2012) 『日本語の「主題」』ひつじ書房. /金水敏 (2012) 「疑問文のスコープと助詞「か」「の」」東京大学国語国文学会 (編) 『国語と国文学』89(11):76-89. /金水敏 (2021) 「日本語「ノダ」文の情報構造」関西言語学会第 46 回大会招待講演. /国広哲弥 (1992) 「「のだ」から「のに」・「ので」へー「の」の共通性ー」名古屋大学出版会『日本語研究と日本語教育』17-33. /久野暉 (1973) 『日本語文法研究』大修館. /靱山洋介 (2012) 『認知言語学入門』研究社. /野田春美 (1997) 『の (だ) の機能』くろしお出版. /野村益寛 (2020) 「参照点」『認知言語学Ⅱ』ひつじ書房 (第 3 章):55-72. /田野村忠温 (1990) 『現代日本語の文法Ⅰー「のだ」の意味と用法ー』和泉書院. /寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版. /山口佳也 (1975) 「「のだ」の文について」早稲田大学国文学会 (編) 『国文学研究』56:12-24. /Langacker, R.W.(1993)Reference-point Constructions.cognitive Linguistics4:1-38./Langacker,R.W.(2008)cognitive Grammar:A Basic introduction.Oxford University Press.